

研究ノート

# 女子学生、乳幼児子育て女性層を対象とした 防犯と防災の視点から安全・安心のまちづくりの 課題解決プログラムの開発と課題

檜村久子

## 要旨

安心・安全のまちづくりの中でも、近年地域の防災や防犯への取組が求められている。これまで、行政と既存の地域団体組織との連携で考えられていたが、学生、高齢女性、子育て女性、働く若年男性等は地域への参画は少ない。本稿では防犯では地域の大学と女子大生、防災では災害時に避難が困難と考えられる乳幼児子育て女性層を対象にプログラムを開発し、現地調査やマップ作り、話し合い等から、プログラムの必要性和課題を検証した。その結果、多様な市民に対して対象別に防災や防犯のプログラムの重要性、マンション住民と地域との連携や住民同士の日常のコミュニケーションの重要性、行政の地域の既存組織以外の市民との連携・協働が必要であることが分かった。

キーワード：防災、防犯、安全・安心、まちづくり、若年女性層

## はじめに

2011年3月11日の東日本大震災は広範囲にわたる未曾有の災害を日本にもたらした。関西では阪神淡路大震災が残した多くの教訓から、さまざまな災害への備えが地域で取組まれてきた。そして安全・安心のまちづくりは市民や行政の大きな目標や期待になっている。

しかし、実際に体験した人でないと実感が無く、時間を経るほど忘れていく可能性が高い。また、地域や自治体での取組や防災や防犯の会議において参加し、議論をする市民は限られる。しかし、災害や犯罪に遭遇するのは多くの市民であり、その年齢層や家族形態、ライフスタイル、居住形態も多様である。

そのため、特にこれまで安全・安心のまちづくりに関わってこなかった市民層、つまり学生、働く人、乳幼児子育て層、また今後重要な対象者である高齢層、マンション居住者がどのように防災や防犯を対象にして安全・安心のまちづくりに関わっていくことができるかを考える必要に迫られている。

そこで、本稿では対象地を大阪市域とし、その中でさらに地域の特性と居住する市民の年齢層などを特定して、防犯と防災の視点からどのように取組むことができるか、プログラムの開発と実践により検証し、その効果と課題を整理、分析する。具体的には女子学生、乳幼児子育て家事専業層、マンション居住者高齢層、マンション居住者若年男性層である。

## I 既存組織以外の市民の地域における課題解決支援プログラムの必要性

これまで、防犯、防災などの地域課題の解決を進めるため自治体では多くの場合地域活動の担い手であった地域振興町会（自治会）を対象としてきた。自治体との話し合いの場では女性層、子育て層、学生、日中働いている市民等の参加・参画は少くない。

「女性の政策・方針決定参画状況調べ」（内閣府男女共同参画局、平成24年1月）によると、平成23年で自治会長は全国で23万1983人の内、女性は1万0033人で4.3%、都道府県防災会議委員は2419人の内、女性は87人で3.6%、消防団員は87万9978人の内、女性は1万9577人で、2.2%しかいない。女性は実際に地域で地域活動を担っているにもかかわらず、組織の運営や方針決定に関わっていない。しかし、防災や災害時においては具体的な地域課題や情報、ニーズ等の把握が必要であり、防犯、防災について、日常のまちづくりに参加、参画する必要がある。それが、女性の社会的におかれた状況や、身体的特性への理解の不足や配慮の不足につながると考えられる。

また、大阪市の人口動態は中央区、北区、福島区、西区、天王寺区の中心部においては0歳～9歳の子どもと親の層が増加している。

居住環境では、住宅着工戸数（『大阪市時系列統計表 第6編住宅・土地統計調査』）から、平成14年から平成18年にかけて新設数が多く、北区、中央区、西区、次いで天王寺区や福島区が伸びを示している。このような新設住宅はマンションであり、子育て層が中心部で居住できる状況を作っている。（『男女共同参画のまちづくり／子育て中のパパ・ママにやさしいまちづくりを考える調査研究報告書』大阪市男女共同参画推進事業体、平成22年3月）

しかし、大阪市の区役所へのヒアリングにより、防災や防犯、災害時にマンション住民との関係がほ

とんどなく、どの様な関係を創っていくことができるかが大きな不安として存在することがわかった。その理由としてマンション住民同士の関係、高層マンションでは居住者が多過ぎて1つの自治会を結成することが困難である、マンションの自治会の組織状態、自治会の地域振興会への加入等の問題が上げられている。

以上から、プログラムの対象をこれまで自治体との関わりや自治会等の地域の意思決定に参加していない市民層、つまり子育て女性層、学生層、高齢女性層、働く若年男性層とする。また都市部の高層マンションにおける地域コミュニティの未形成による課題も含め、地域の防災や防犯への多様な市民層の参画の具体的なプログラムの開発を企画、実践、分析する。

### 調査地域の選定の背景

調査地域の選定に当たって、大阪市の中心部を西区、中央区、北区、郊外部を東住吉区、平野区をプログラムの実施候補地域とした。上記の区はこれまで調査対象としたことがあり、また防災、防犯、子育てなどを区の課題や事業と考えていることから、また大阪市の男女共同参画センターが立地し協力を得やすいためである。

各区の市民協働課へのヒアリングから、区の運営方針の経営課題から、東住吉区は防犯について、西区は子育てと防災をテーマにしたプログラムの素案を提示し、地域の市民や組織との協働の関係を模索しながらプログラムを作成した。

東住吉区では、大阪府における犯罪の統計データから、女性が街頭犯罪のなかでひったくりや路上強盗の被害に遭いやすい時間帯と年齢層別に整理し、これを元にプログラムを作成した。

## Ⅱ 若年女性層（学生）を対象とした防犯についてのプログラム開発

防犯についてのプログラムは、東住吉区では大阪府警のHPのデータを以下のように整理し、地域にある大阪城南短期大学の協力を得られ、協働できることから、20代若年女性層である学生を対象とした。

また日常まちづくりや地域、男女共同参画に関心が薄いと思われる若年女性層にそれらについて関心を持ってもらうことをまず目的にした。またまち歩きのフィールドワークの結果を、東住吉区役所へ情報提供を行い、地域における安全・安心の推進や男女共同参画へつなげることをめざした。

女性の年齢層と街頭犯罪の発生時間関係と調査想定場所

年齢層	街頭犯罪にありやすい時間帯	まち歩きの想定場所
20代（学生）	夜間（18～23時）	大学や駅周辺
30～40代（専業主婦と子ども）	夕方（15～17時）	学校周辺
高齢者	昼間（10～14時）	住宅地、商店街

### 連携・協力体制と参加者

女性若年層として、同区にある大阪城南女子短期大学、女性の地域の社会参画をめざすクレオ大阪中央、クレオ大阪南、大阪市男女共同参画課が連携・協力し、共催とした。また地元の東住吉区役所の協力を得た。参加者は同短期大学の一回生62人である。

### 企画の背景

大阪市東住吉区では、近鉄南大阪線の沿線とその周辺で街頭犯罪や子どもや女性をねらった犯罪が多く発生していて、被害者の多くが北田辺、今川、針中野、矢田の4駅やその沿線を利用している割合が多い。そのため同区ではこの沿線を「犯罪撲滅ロード」に指定して犯罪の撲滅をしようと取り組んでいる。

多人数でのまち歩きになるため、事前に地域の人々に知ってもらう必要があることと、またまちづくりや地域の防犯やまちづくりに関心を持ってもらうために、連合振興町会の会議において説明し、地元地域の協力要請をした。

### プログラムのねらい

大阪府警のデータを分析すると、女性は男性よりひったくりや路上強盗の被害者となる割合が高く、特に20代の女性は他の世代よりも被害に遭う割合が高いことがわかる。そのため安全・安心の視点から、

### プログラムと日程

プログラムは大阪城南女子短期大学では、講義の一環として①事前講義や②フィールドワークをしてまち歩き、③事後講義で話し合いとまとめ、マップの作成をした。

日程表は次のとおり。（表-1）

表-1

回	日程	内容	実施場所	参加人数
1	10月3日（月）・6日（木） 13：00～14：30	講義・事前アンケートの実施 ・趣旨説明、まち歩きにあたっての注意	大阪城南女子短期大学	62名
2	当初予定 11月19日（土） 13：00～15：00	11月21日（月） 24日（木） 13：00～14：30 まち歩きの実施	現地	58名
3		11月28日（月） 12月15日（木） 13：00～14：30 講義・事後アンケートの実施 ・班ごとに話し合い、まとめを発表	大阪城南女子短期大学	35名

まち歩きの実地調査エリアとルートの選定 ①鷹合、②湯里、③照ヶ丘矢田の多様な場所を選定した。鷹合、湯里、照ヶ丘矢田とし、さらに近鉄線路の東側と西側に分け、5ルートを含み、90分の講義時間で回れる距離で、大学周辺ととした。(表-2)

表-2

実際のルート	当初の予定ルート	イメージ
①鷹合	①駒川・鷹合（西側）	商店街 → にぎわい
②湯里	②針中野・湯里（東側）	針と湯 → 癒し
—	③矢田・公園南矢田（西側）	大和川、クラインガルテン広場 → 自然
③照ヶ丘矢田	④照ヶ丘矢田・住道矢田（東側）	学園の周辺 → 日常生活
—	⑤長居公園	公園、球技場 → 健康

まち歩きの実地調査の視点とキーワード

本来の調査目的は防犯の視点からのチェックであるが、地域やまちづくりに若年女性や学生の視点を反映させるために、どの様なことに着目するか、何が魅力であるかも視点に入れた。

そこでチェックするキーワードとして、安全、安心、便利、快適、思いやり、おもてなし、女性、若者、おもしろそう、を項目に入れ、まちのソフト面（サービス等）とハード面（施設・設備）を見た。

事前アンケートによる意識化

実際にまち歩きをする前に、地域の社会活動への参加や、女性がまちづくりに積極的に関わっていくことについて、安全・安心への不安、また男女共同参画への関心等を学生に事前アンケートで聞いた。

「安全・安心のまちをめざして、女性がまちづくりに積極的に関わっていくことについて」は、「そう思う」は22人（36.0%）、「ある程度そう思う」が30人（50.0%）、「そう思わない」は2人（3.3%）、「そう思わない」2人（3.3%）、「わからない」3人（4.9%）で、ほとんどの女子学生が積極的に関わっていく意識があるとみられる。

「あなたは、自宅近辺や通学等の日常生活において、安全・安心を脅かされたり、不安を感じたことがあるか」では、「ある」が27人（44.3%）、「ない」は33人（54.1%）。半数弱が何らかで不安を体験し

ている。

具体的には、①不審者からの声かけや痴漢等が11件、②街灯の少なさや道の暗さ等が10件、③道路の狭さ等が5件、④その他が1件。

- ①不審者からの声かけや痴漢では、
  - ・学校の前で前から来た人にささやかれ気持ち悪かった
  - ・高校の時に自転車の後ろに乗せてくれと言われた
  - ・通学中に男の人に声をかけられてついて来られた
  - ・男の人に家まで追いかけられた
  - ・不審者や痴漢があったと聞いたとき
  - ・露出狂が多い、暗いと不安
  - ・足をけがした男性を支えてバスに乗ったら、その男性になでられて、介護したことを後悔したなど善意を踏みにじる行為も見られる。
- ②街灯の少なさや道路の狭さをあげた学生も多い。
  - ・夜の道が真っ暗で怖い
  - ・街灯が少なくて怖い
  - ・暗くなってからの矢田駅までの道が暗くて怖い
  - ・家の前の道路は街灯があるが、人气が少ないので不安
  - ・ひたたくりがよくある、など。
- ③道路の狭さも不安の原因になっている。
  - ・狭い道が多く、夜になると不安
  - ・信号の無い交差点
  - ・駅横の踏み切りで車に引かれそうになる など。

④その他、「(近所の人に) 見張られている」と感じて不安を持つ学生もいる。

このような事前アンケートで、自分のまちの経験を思い起こし意識化した。

#### まち歩きによる現地調査

まちについての自分の経験を概観した後、実際に現地を調査した。グループ毎にルートに沿って町を歩き、写真撮影、インタビュー、インタビュー記録、グループリーダーの各係りを決め、全体の進行管理をした。(写真-1、写真-2、写真-3、写真-4)

マップの作成と「〇〇なまち」と「〇〇なまちのために自分ができること」のまとめ

事後講義で、以下の方法で調査をまとめた。

①グループ毎にまち歩きを振り返りながら、「安全

と安心」に加え、「〇〇なまち」にしたいという東住吉区の町のイメージを考え、

②次に「〇〇なまちのために自分たちができること」を話し合い、その結果を模造紙一枚にまとめた。

③最後に、グループで発表し、情報の共有化を図った。

各グループの事例として、ルート鷹合の2つのグループまとめを以下にあげる。

- 1 マップ「東住吉区的女子大生がつくる！ 安全・安心・〇〇なまち  
“東住み良し”マップ～〇〇編～(地図-1)
- 2 チェックシートの整理
- 3 「〇〇なまち」と「〇〇なまちのために自分ができること(図-1)(図-2)

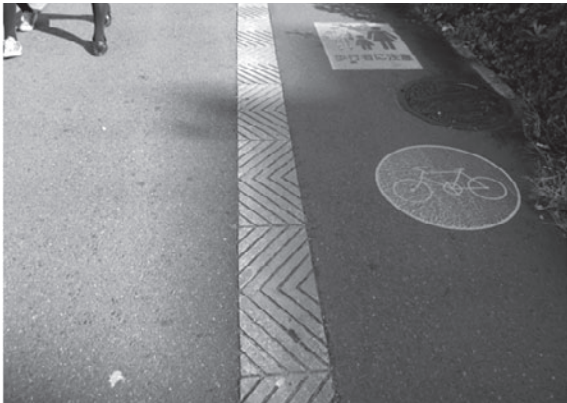


写真-1



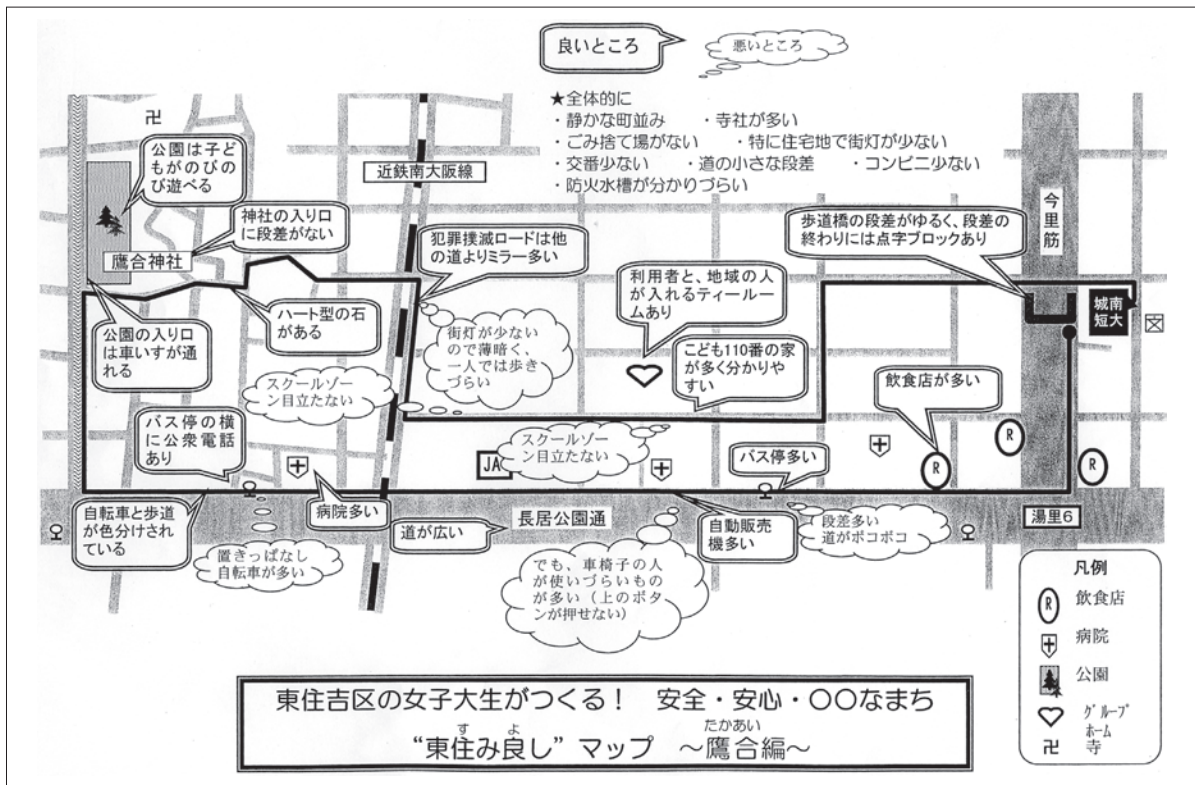
写真-2



写真-3



写真-4



地図-1

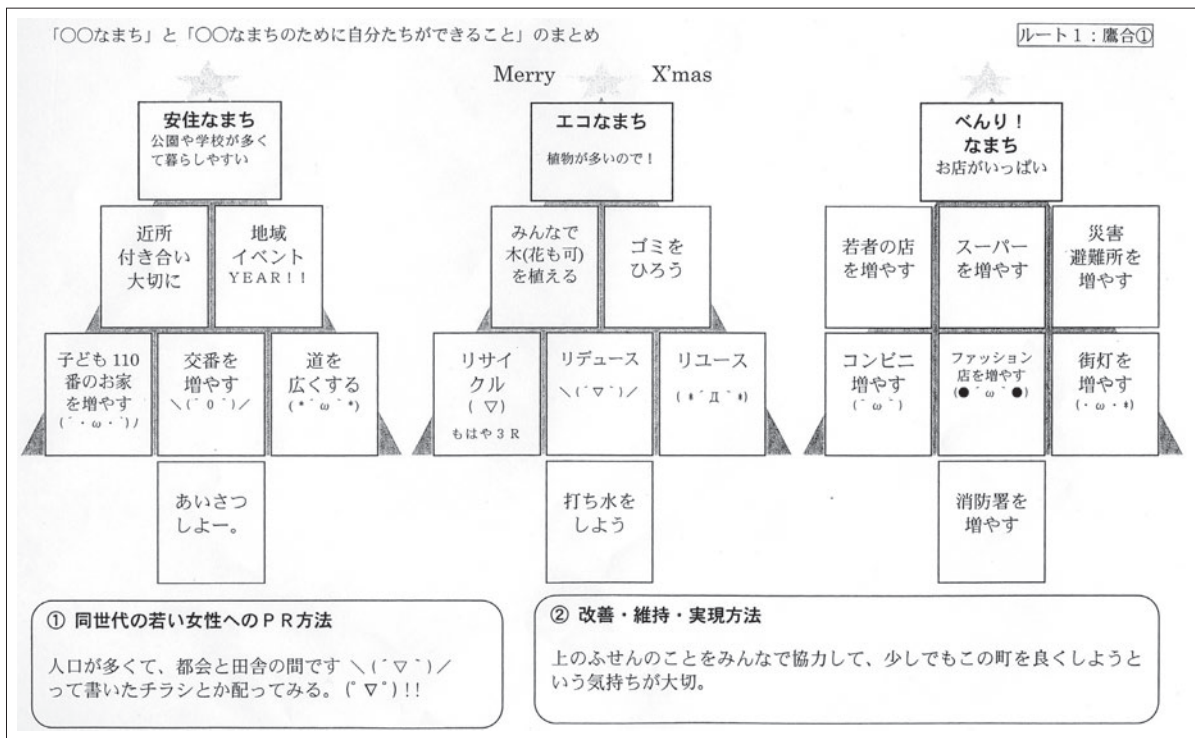


図-1

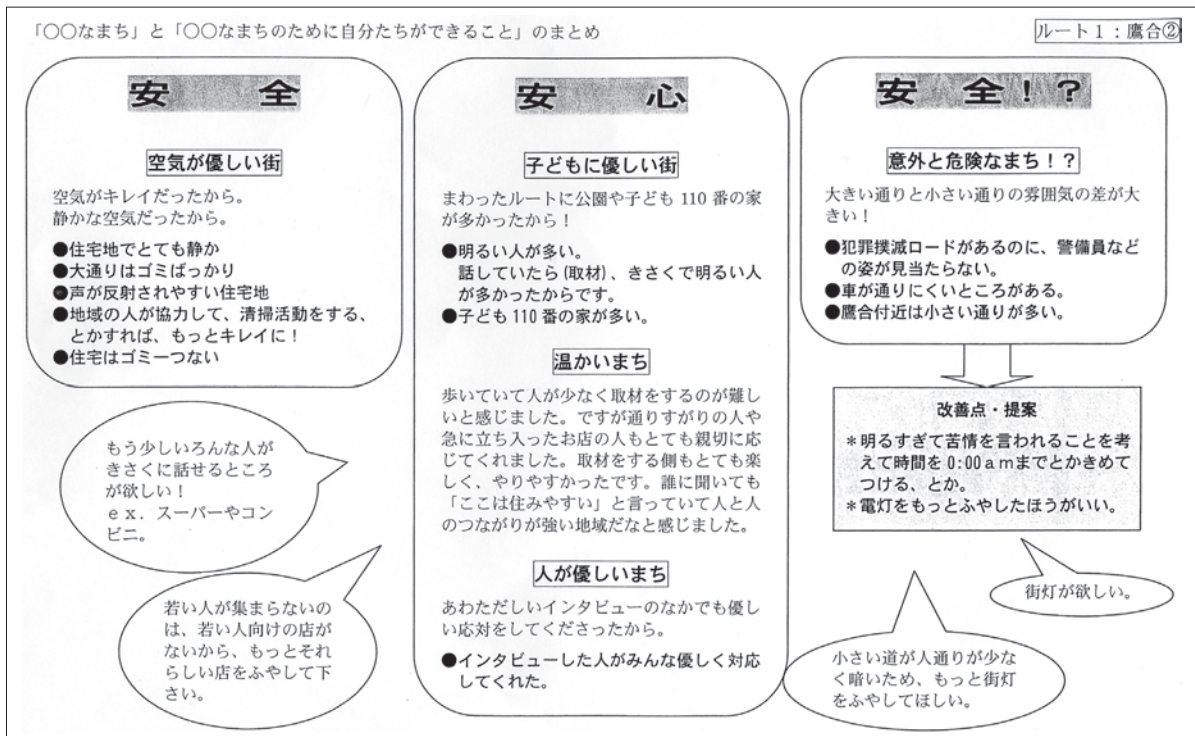


図-2

成果と課題

学生への事後アンケートでは、安全・安心のまちをめざして女性が積極的に関わっていくことについて、肯定的な回答が8割以上で、否定的なものはごく少数である。また事前と事後のアンケートを比較すると、肯定的な意見は84%から91%へわずかながら増えている。

自宅近辺や通学等の日常生活について安全・安心を脅かされたり、不安を感じたりする場合があります、不安がある場合の具体的な内容は性的な被害であり、街灯が少なく道が暗いことへの不安や道が狭いことによる交通事故の不安が明確になった。

通学時に気づかなかった町の姿について知る良い機会になった、町歩きの体験が楽しかったという回答が多く見られ、はじめは町や防犯についてあまり関心がなくても、まちについて考えるきっかけになり、さらに自分たちにもできることは何かを考えて

みる機会になったと答えており、その点ではプログラムが有効であったと言える。

また、地域で大学や学生と協働、特に講義の一環としてプログラムが実施でき、大学教員や事務局職員も日常気にかけていた安全・安心の視点で町を見ることができ、学生のマップ作成など成果を大学としても冊子作りに反映し、地域の情報として発信できたことも成果である。

課題として、大学の授業の一部として実施したので、夜間のまち歩きを実施できず、最も安全・安心が求められる夜間の時間帯に歩くとさらに実際的な発見があったと考えられる。また、区役所との協働が調整できなかったが、学生の自主的なボランティアな活動では区役所と大学の協働が可能であり、地域では学生やNPOなどこれまで関係が少なかった市民と防犯の取組の協働が必要である。

### Ⅲ 乳幼児子育て女性層を対象とした防災についてのプログラム開発

#### 企画の背景

プログラムの実施対象地域を大阪市西区とした。同区は市内中心部で人口増加地域であり、マンション建設により子育て世帯が増加している。しかしマンション住民の多くは地域との交流があまりない。防災について近年の災害報道等により意識は高まっていると考えられるが、非常時の備えは十分とはいえない。特に昼間は夫が勤務に出て家庭におらず、女性は子どもとだけにいる場合が多い。こうした状況下で災害が発生した場合、子どもを伴ってどのように避難するのか、また地域の人たちとの関わりや情報がどのように持つことが可能なのか。特に乳幼児である場合特別な困難が予測される。そのため、乳幼児がいる在宅の女性層を対象とした。

#### プログラムのねらい

地域に日常生活しているとはいえ、災害が起きた非常時に地域のどこに何があるか、必要な施設がどこにあるか、どの様に非難できるのかなど地域の状況を知っておくこと。また子育て中の同世代の女性同士やマンション住まいの女性たちが、このプログラムに参加することで互いに顔見知りになり、できれば継続的に関係性を持つことで、地域コミュニティのつながりを作ることができることをねらいとした。

#### 企画

- ・同区にあるNPO法人・遊びのお部屋シュポッポは乳幼児と母親が利用している。このNPO法人とクレオ大阪中央、クレオ大阪西、(財)大阪市女性協会、大阪市男女共同参画課の共催とした。
- ・参加者はNPO法人のつどいの広場利用者の母子11組(22人)と保育者7人。子どもは0歳児9人、1歳児2人の乳幼児11人。

- ・実施時期は2011年12月1日(木)、13時～16時10分
- ・まち歩きの実施場所の設定

乳幼児をベビーカーで歩くため、歩く時間を1時間半程度の範囲とする。また下記の災害を想定した時に、防災視点で見べきものがある場所とした。そこで、同区南堀江から北堀江の間でルートを設定した。(地図-2)

- ・まち歩きの想定と視点

乳幼児連れの親子がつどいの広場に来ていた時に大きな地震が発生し、子どもを連れて避難所や自宅まで帰るにはどのような危険や困難があるか、という状況を想定。

乳幼児をもつ女性が防災の視点で主としてハード(施設や設備等)を見る。

キーワードとして、道路、一時避難所(公園)、収容避難所(小学校)、落下物、ビル等、病院、薬局、コンビニエンスストア、ガソリンスタンド、空き地、助け合い、その他とした。

#### プログラムの内容

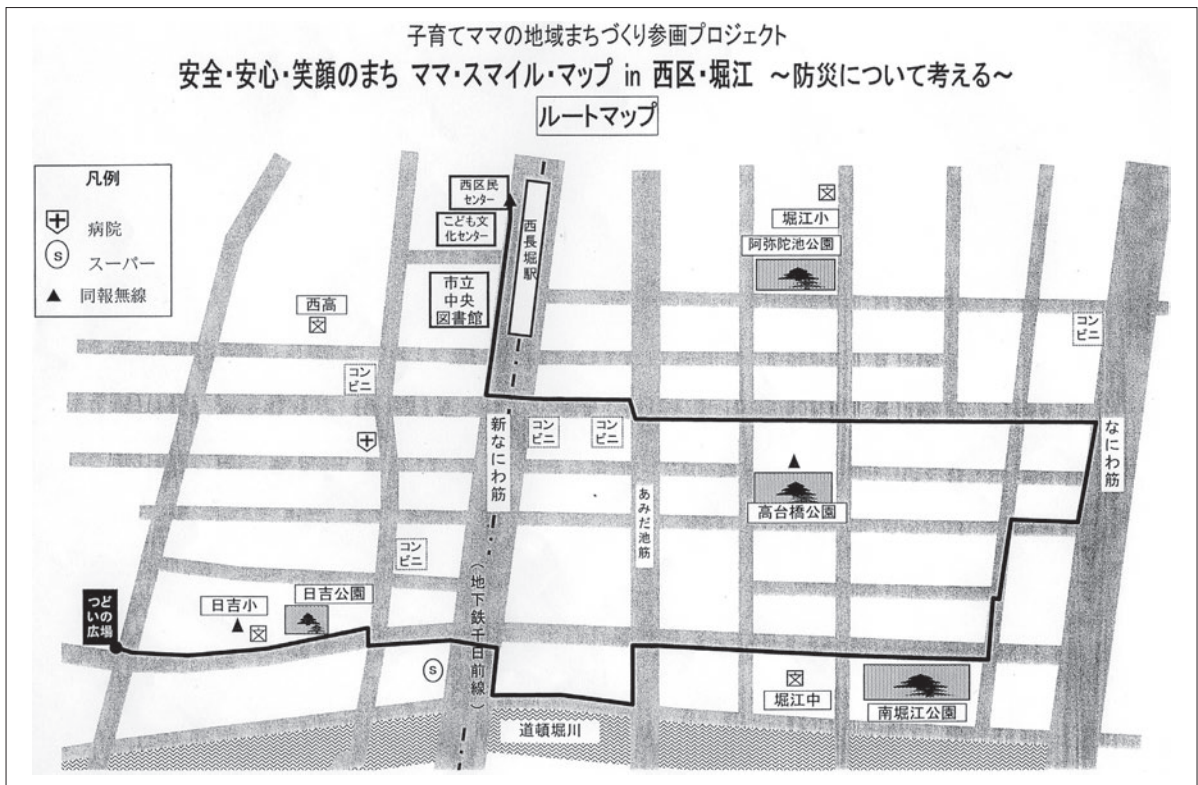
プログラム後半の「ママ・スマイル・マップ」の作成とみんなで話し合いの時間帯は、西区区民センターの会議室とし、NPO法人・遊びのお部屋シュポッポの保育スタッフが別室で乳幼児のケアを担当した。(表-3)

#### 配布資料

趣旨説明書、タイムスケジュール表、わが家の防災マップの作り方、東日本大震災関連の新聞記事、まち歩きのルートマップ、チェックシート。(表-5)

チェックシートで、キーワード毎に、「安全な所(良い面)」とその理由) また「危険な所(悪い面)





地図-2

表-3

時間 (予定)		内 容
前 半	13:00~13:30 (30分)	オリエンテーション ・西区の防災について (15分) (講師: 西区役所・防災担当) ・男女共同参画の視点とまち歩きのポイント (15分)
	13:30~14:50 (80分)	ベビーカーでまち歩き ~シュッポポから避難場所まで歩いてみよう~
休 憩	14:50~15:00 (10分)	休憩 子どもたちは一時保育へ
後 半	15:00~15:45 (45分)	ママ・スマイル・マップの作成 ・まち歩きから観察できたことのマッピングとまとめ ・西区のイトコ、話しましょ!
	15:45~16:10 (25分)	みんなでふりかえり ~ママ、子ども、保育スタッフ、みんな揃ってふりかえってみよう!~

とその理由」を記入し、その場所を写真に撮った。  
(写真-5、写真-6、写真-7、写真-8)

ベビーカーでのまち歩きのルートとチェックポイントは以下のとおりである。

表-4の災害ボランティア登録事務所・店舗とは「災害時地域協力貢献事務所・店舗登録制度」のこ

とで、大規模災害時に、事業所・店舗等の人的・物的資源を活用し、地域の救出・救護活動に貢献してもらい災害ボランティア制度である。地域において多大な被害が発生し、早急な対応が必要となる場合、事業所・店舗等が自らの従業員の安全を確認し復旧のめどが立った段階での協力を依頼している。



写真-5



写真-6



写真-7



写真-8

表-4

時間	チェックポイント	備考
(出発) 13:30	つどいの広場シュッポッポ	
	日吉小学校 (南堀江4-9-19)	収容避難所、防災スピーカー 津波避難ビルとして指定
	日吉公園 (南堀江4丁目)	一時避難所
	汐見橋 (道頓堀川)	
	なにわ筋	淀川が氾濫した場合、これより西側 は0.5~3.0m浸水予測
	立花通り (オレンジストリート)	ガラス張りのビル等
	災害ボランティア登録事業所・店舗	(2箇所程)
(到着) 14:50	西区民センター	

表-5

子育てママの地域まちづくり参画プロジェクト  
安全・安心・笑顔のまち ママ・スマイル・マップ in 西区・堀江  
～防災について考える～

**まち歩きチェックシート**

平成 23 年 12 月 1 日(木)

氏名: \_\_\_\_\_

【想定】①「シュッポッポ」に来ていた時、大地震(台風、火事、浸水)が発生。  
②子ども連れやベビーカーで避難所や自宅まで帰る際の危険や困難は!?

・危険な所、安全な所を、施設や設備の「ハード面」、サービスや支援の「ソフト面」からできるだけ具体的に記入する。

例えば…高層ビルのガラスや壁が落下、電線が切れる、津波から避難できる高層マンション、防災スピーカーの位置確認、大きな病院がある、等々

キーワード	安全な所(いい面)とその理由	写真	危険な所(悪い面)とその理由	写真
道 路				
一時避難所 (公園)				
収容避難所 (小学校)				
落下物・ビル等				
病 院 薬 局 コ ン ビ ニ ガ'ソリナ'ス'タ'ン'ド' 空 き 地				
助 け 合 い				
そ の 他				

まち歩きによる現地調査の結果とまとめ

西区民センターでの、まち歩きのふりかえりでの参加者の発言は以下のようである。

①ベビーカーと災害について

- ・逃げる時にはベビーカーは使えないし、危ない
- ・ベビーカーは荷物を積むのに使うぐらい
- ・身に近いところで子どもを守る
- ・駐輪マナーが悪く、ベビーカーが歩道を通れないことがある

②避難場所

- ・堀江はマンションが多いので、マンションに逃げられるようにしてほしい
- ・マンションの屋上だけに入れるようにしてはどうか
- ・地震で停電した時に入れるようにすればよいが、防犯上危ない
- ・避難場所の数は足りているのだろうか

- ・オフィスに避難できるのではないかと、自動ドアは手で開くことができる
  - ・お寺も避難所としてよいのではないかと
  - ・病院も避難所になるのではないかと
  - ・病院が多く、大きな病院だと24時間対応もできる
  - ・大きな地震でもマンションは安全なのか、マンションごと津波に流されるのではないかと
  - ・できるだけ新しそうなビルの上に行くしかない
  - ・子育てセンターに避難できたらよい
  - ・汐見橋に津波の碑が建っている。「住んではいけない(危ない)」との文言がある
- ③防災のための設備について
- ・地震を一斉に知らせる手段はないか
  - ・日吉小学校の防災スピーカーは、本当に鳴るのか、聞こえるのかをチェックしてほしい
  - ・公衆電話が少なくなっている。安否確認等、最近では携帯でもできるが、高齢者など所持していない

人には無理である。無料で使える電話があるなど考えられる

- ・住之江区では車の通る数を制限している
- ・見晴らしが良いように、公園の周りの木を伐っている
- ・電線が多く、地震の時に不安

④マンション内での取組の可能性について

- ・マンションではないが、防災訓練には参加したいと思う
- ・マンション内で備蓄をしてほしい。自分で備蓄をしたら人にも提供できる
- ・さりげない協力はできる
- ・具体的に話を進めたいが、まず同じマンションの住民だけで話をし、実際にまち歩きの際は大きな範囲にして集ることもいいのではないか
- ・自分のマンションで誰が声掛けをするのか、自分がでしゃばりだと思われたくない

⑤地域での取組

- ・警察が主催するイベントは怖いと思う
- ・地域での会館での催し（子育てサロン）で知り合った
- ・小学校は投票所なので、子どものいない人も知っている
- ・ママ向けのイベントにパパも一緒に参加できるようにしてほしい
- ・子育て広場などは男の人は入りにくい
- ・男手の入る遊びもできたらよい

こうした災害の時に、誰が声掛けするのか、情報をどの様に知るのか。特に、都市部のマンションでは人や地域とのつながりが希薄であると考えられる。

⑥家族以外の交流

- ・仕事で付き合う時間も無かったので、子どもが生まれるまでは知り合いもいなかった
- ・挨拶をしてくれる人もいる
- ・知り合ってもメールアドレスを把握していいのか、わからない
- ・住所を知っていいのか、人との距離感に悩む

⑦マンション内での交流について

- ・マンションでも賃貸だと入れ替わりもあり、なかなかむつかしい
- ・挨拶をする程度
- ・引っ越してきた時にあいさつ回りをしたからか、親しくしている
- ・よく声をかけ合う
- ・掲示板にお知らせも貼っている
- ・管理人の熱意を感じる
- ・子どものつながりで交流がある場所もある

まち歩き後の話し合いの中で、家族以外の人との交流や、マンション内での交流があまり無く、子どもによってかろうじて他人とつながりが持てていること、積極的につながりをもつという意思が少なく、コミュニケーションをどの様に人とのつながりを創るのかがあらためて浮き彫りになった。わずか半日であったが、一緒にベビーカーを押して町をチェックして歩き、特に子どもを別室で保育スタッフに託して、母親同士が地域の防災を考える話し合いをしたことで、家族以外の人とのコミュニケーションがとれたことを喜んでいて、「このような場をまたもてればよいなあ」という期待の声があがった。

成果と課題

「我が家の防災マップの作り方」は、実際のまち歩きプログラムの現地調査の前に参加者に記入してもらう予定になっていた。しかし、当日に他の資料とともに配布されたことで参加者には自宅周辺のチェックができていなかった。しかし、結果的に事前に記入することは市民には難しいことがわかった。

「我が家の防災マップの作り方」は、大阪市此花区役所の「我が家の防災マップの作り方」を参考に、参加者の自宅から避難所までの周辺地図を書いてもらい、次の項目を地図上に記入してもらう方法である。

- ①まず自分の家の位置を地図上にマークする

- ②自分の家に一番近い避難場所を見つけてマークする（一時避難場所＝区内の公園、収容避難場所＝台風や地震などの災害時に建物内に避難できる学校など）
- ③避難場所への経路を書く（自分の家から一時避難場所への経路は赤色、一時避難場所から収容避難場所への経路は青色）
- ④水源に水色で印をつける（消火のときに水源となる所、プールや貯水槽、川、池など）
- ⑤避難場所以外の空き地に色を塗る（オープンスペースを探す）
- ⑥危険な箇所に危険シールを貼る（避難場所までの経路で危険な場所にマークする、何が危険なのかを詳しく書く）
- ⑦材木や、鉄工所、コンビニ、薬局にマークする
- ⑧自分で調べたことを直接書き込む

記入しようとして、次の点が問題としてわかった。参加者の多くは、乳幼児を持つ若年女性層で、マンション等に居住し、自宅に居住している年数が短い。そのことにより、自宅周辺の地図をどこまで書けるか。一時避難所や収容避難場所になっている公園や学校の名前や位置が分からないことが多い。また、自分で区役所などが作成している避難場所の記入されている地図などを持っている人は少ない。避難場所への経路は地震や火災等では公園などが避難場所に適している。しかし、東日本大震災のような大津波や大洪水の場合は公園等の平地では役に立たず、高い位置への避難場所と経路が必要となる。また、一時避難場所から収容避難場所への経路を書くという二段階になっているが、津波や洪水の場合は、当初から高台の場所への避難が必要となる。火災のときに初期消火のための水の存在を知っておく必要があるが、貯水槽やプールなどどこにあるかは一般の市民には知られていない。避難場所以外の空き地は、例えば公有地などはフェンスで囲まれていたり、また「オープンスペース」とはどのような所を指すのか、

具体例がないとわかりにくい。避難ですぐに必要な緊急の食料など雑貨はコンビニエンスストアやケガをした場合など薬局の位置を知っておくことが重要である。材木屋や鉄工所はどんな時に必要になるのかが知られていないし、どの地域にもあるものではない。

以上から、事前に我が家の防災マップを作成することは実際は困難であることがわかる。まち歩きをして現地調査をして始めて、その視点と位置を確認し、あるいは自分の知らない、必要とする場所を調べようとするのではないかと考えられる。

また“市民”といっても多様である。年齢層、今回のように乳幼児連れの女性、介護を必要とする人、一人暮らしの人などで異なる。災害が夜間か昼間かでも、家族の存在の状況は異なる。それぞれ市民の状況に応じた災害からの避難の方法と、事前準備が求められる。

特に、都心部のマンション居住者の災害避難や防災は大きな課題があることがわかった。その1つが、乳幼児の子育て若年女性層である。まち歩きの現地調査のまとめの話し合いで明らかになったことは、まず、乳幼児の子育て若年女性層は、マンション居住者が多く、マンション内や近隣地域とのコミュニケーションが少なく、また地域とのつながりが少ない。マンション内での交流や家族以外の人との交流がほとんどなく、マンション内や地域での防災の取組をするにも、まずコミュニケーション、つながりを必要としている。まずはそのきっかけを創っていくことが重要であることがわかる。今回のような、災害を想定した場合、どのようにマンションで考えるか、マンションと地域との関係をどのように作っていくか、から始めても良い。

その場合、マンションの中の住民だけでなく、地域との取組と連携、連動させることが必要になり、区役所との関係をどの様に作っていくか、むしろ区役所はマンションに居住する市民とどのように関係を作っていくのかが問われることにもなる。

## まとめ

今回の防犯や防災の視点からまちの現地調査を含めたプログラムを実施した。その結果、“市民”といっても多様であり、性別、年齢、家族形態、ライフスタイル等で異なり、その実態とニーズに合ったプログラム、また昼夜間の時間帯でも異なるプログラムの開発が必要であることが分かった。そのため課題解決に向けた対象別プログラムの重要性が必要になる。

また日常から地域の人間とのつながり、コミュニケーションの重要性、マンションと地域での交流の

重要性も再確認された。特にマンションの住民同士のコミュニケーションをどの様に創っていくか、防犯や防災の視点から大きな課題である。

これまで、行政と既存の地域団体組織との連携で考えられていた防災や防犯は、それに所属していない多様な生活の市民や、増加する一方の都心マンション居住者との関係をどの様に構築し、防災・防犯のまちづくりにつなげていくのが核となる課題である。

### 謝辞

本研究は、(財)大阪市女性協会で行った調査研究の一部であり、調査にあたって多くの人に多大な協力を得た。同協会の水本梨恵氏、吉峰英一氏、大阪市男女共同参画課の職員、大阪城南女子短期大学の小林孔教授と大学職員、防犯プログラムに参加した女子学生の皆様、東住吉区役所市民協働課の職員、NPO法人遊びのお部屋シュッポポの所長と保育スタッフの皆様、またベビーカーで災害マップの現地調査に参加した母子の皆様、株式会社都市文化研究所の金井文宏代表、仏教大学の浜岡政好教授には深く感謝を申し上げます。

### 参考文献

- (財)大阪市女性協会(2012):『地域における男女共同参画の課題解決支援プログラムに関する調査研究報告書』
- 内閣府男女共同参画局(2012):『女性の政策・方針決定参画状況調べ』
- 大阪市男女共同参画推進事業体(2011):『平成22年度男女共同参画のまちづくり/子育て中のパパ・ママにやさしいまちづくりを考える』
- 大阪府中央区(2010):『平成21年度 地域とマンション居住者の交流促進のための区内マンション居住者等ニーズ調査報告書』
- 仏教大学総合研究所・中京区都心居住研究会(2007):『中京区のマンション生活に関する実態調査』